Osaka Gakuin University Repository

Title	海岸ツィムシアン語の使役接辞について On the Cansaie Affixes in Coast Tsimshian
Author(s)	笹間　史子 (Fumiko Sasama)
Citation	大阪学院大学　外国語論集（OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 63 号：31-48
Issue Date	2011.12.31
Resource Type	Research Note/ 研究ノート
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

大阪学院大学 外国語論集
第63号　　2011年12月

海岸ツィムシアン語の使役接辞について

笹　間　史　子

On the Causative Affixes in Coast Tsimshian

Sasama, Fumiko

1．はじめに

海岸ツィムシアン語（Coast Tsimshian）はカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州北西部およびアメリカ合衆国アラスカ州南東端で話される北米先住民語のひとつである。

海岸ツィムシアン語には、他動詞語幹を形成するのに用いられる接辞がいくつか存在する。随伴者を導入する接頭辞のtə-[*1] 'with' 、共同作業者を導入する接頭辞のsəla- 'with'、移動の起点や避難の対象を導入するc̓əns- 'away from'、そして使役的に用いられるsə- 'make', kʷən- 'make, tell, ask'、そして接尾辞の-n̓（-l̓）'make, tell, cause'である。これらの接辞については、Boas 1911, Dunn 1979, Dunn 1983, Mulder 1994, Sasama 2001など、さまざま

1　海岸ツィムシアン語の表記は音素表記による。海岸ツィムシアン語の音素は以下の通りである。子音p, t, kʲ, k, kʷ, q, pʰ, tʰ, kʲʰ, kʰ, kʷʰ, p̓, t̓, k̓ʲ, k̓, k̓ʷ, q̓, ʔ, c[ts-dz], cʰ, c̓, λ̓, s, ɬ, x[χ], h, m, n, l, j, uɻ, w, m̓, n̓, l̓, m, j̓, u̓ɻ, w̓, 母音i, a, o, u, ɯ, ə, iː, eː, aː, oː, uː, ɯː.

な先行研究で言及されているものの、簡単なグロスと数点の例があげられているにすぎないものも多く、その詳細についてはほとんど記述されてこなかった。

本稿は、これら他動詞語幹を形成する接辞のうち、使役的な働きをもつ接辞であるsə-, kʷən-, -n̓ (-l̓)に焦点をあて、これらが

・どのような音韻的ふるまいをみせるか

・どのような語幹（あるいは語根）につくか

・項関係はどのように変化するか

・使役者・被使役者にはどのようなものが観察されるか

を記述し、3つの接辞それぞれの特徴を明らかにすることを目的とする。以下、2節でsə- について、3節でkʷən-について、4節で-n̓ (-l̓)について、それぞれみてゆく。

なお、本稿で接頭辞とよぶ要素は、先行研究ではしばしば"particles"（例えば Boas 1911）あるいは"proclitics"（例えばDunn 1979）と呼ばれてきた。しかしながら、音声的なあらわれ、ホストの選択、接辞・クリティック間の位置関係、さらに重複との位置関係などからみて、これらが接頭辞であることは明らかであると思われる。

2. sə- 'make'

接頭辞sə-は、母音シュワを含む形を基本とするが、口蓋垂音、声門音に先行するときはsa-の形をとる。

（1）sə-mà:j[*2]　　'to pick berries'

　　sa-q̓almó:s　　'to fish for crabs'

2　本稿で用いた海岸ツィムシアン語の例はすべて筆者の現地調査で得たものである。海岸ツィムシアン語の現地調査は、文部（科学）省科学研究費補助金（特定領域研究（A）(2)「アラスカとカナダ北西部の先住民言語の緊急調査」#12039222、基盤研究（C)「品詞の通言語的研究」#22520414）の援助により、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州ハートレイ・ベイおよびプリンス・ルパートにておこなわれた。調査に協力してくださったMildred Wilsonさんをはじめとする話者の方々に感謝したい。

sa-háːxk　　'to make s.o. suffer, to annoy s.o.'

sə-は、自動詞語幹に使役的な意味を加えて他動詞語幹を派生するのに用いられるが、名詞語幹について自動詞語幹を派生するのにも用いられる。名詞につく場合は、その名詞を「作る」、または一般にその名詞に対しておこなう作業（ベリーなら「摘む」、魚介類なら「釣る、採る」、パンなら「焼く」など）を表す。まず、名詞語幹について自動詞語幹を派生する例をあげる。

（2）　a.　j̓úːsəl　　'basket'（n）
　　b.　sə-j̓úːsəl　　'to make a basket'（vi）
（3）　a.　màːj　　'berry'（n）
　　b.　sə-màːj　　'to pick berries'（vi）
（4）　a.　q̓almóːs　　'crab'（n）
　　b.　sa-q̓almóːs　　'to fish for crabs'（vi）

次に、自動詞語幹について他動詞語幹を派生する例をあげる。状態を表す形容詞的なものが多いが、海岸ツィムシアン語では形容詞は自動詞の下位分類として認められる。

（5）　a.　ʔalá:js　　'to be lazy'（vi）
　　b.　sa-ʔalá:js　　'to make s.o. lazy'（vt）
（6）　a.　kʷtíː　　'to be hungry'（vi）
　　b.　sə-kʷtíː　　'to make s.o. hungry'（vt）
（7）　a.　máxs　　'to grow（pl）'（vi）
　　b.　sə-máxs　　'to grow s.t.（pl）'（vt）

sə-により他動詞が派生される場合、元の自動詞主語は派生された他動詞の目

的語となり、そして新たに導入された使役者が他動詞主語となる[*3]。以下、元となる自動詞を含む例文をaに、sə-により派生された他動詞を含む例文をbにあげる。

（8）a.　ʔalá:js-ə-n̓u
　　lazy-E-1sg
　　'I'm lazy.'

　　b.　sa-ʔalá:js-ə-n̓u＝t　　Teresa
　　make-lazy-E-1sg=CN　　(name)
　　'Teresa made me lazy.'

（9）a.　təm　kʷtí:-n
　　TA　hungry-2sg
　　'You will be hungry.'

　　b.　sə-kʷtí:-n　　turkey　łə＝m　　hú:m-t　　n̓ì:
　　make-hungry-2sg　　turkey　TA=2sg　　smell-3　　tagQ
　　'The turkey made you hungry when you smelled it, didn't it?'

3　海岸ツィムシアン語の格表示は能格型を基本とするため、自動詞主語と他動詞目的語が同様のマークを受けるのが一般的である。このため、対格型の言語と異なり、(8b), (9b) などにおいて、使役接辞を付加して形成された他動詞の目的語（被使役者）は自動詞主語のときと同じ形であらわれている。しかしながら、海岸ツィムシアン語において自動詞主語・他動詞主語・他動詞目的語がそれぞれ実際にどのようにマークされるかは、接辞／クリティック／自立語の別、(接辞／クリティックなら) 人称（他動詞なら主語と目的語の人称関係)、(自立語なら) 普通名詞か固有名詞か、テンス・アスペクトマーカー等により決定され、特定の形式が常に「絶対格」「能格」の表示に用いられるわけではない。また、条件によっては必ずしもきれいな能格型を示さないときもある。このため、本稿では「絶対格」「能格」ということばは用いていない。海岸ツィムシアン語における格表示については、Mulder (1994) および Sasama (2001) を参照のこと。

(10) a. có:q-a-n̓u təm ti lu-spaqajt-hóksk^{w}-u
embarrassed-E-1sg TA on.my.part in-among-join-1sg
ta k^{j}át
Prep people
'I am embarrassed to be amongst the people.'

b. sa-qa-có:q=a k̓apa-hanáːnq̓=a
make-pl-embarrassed=CN little(pl)-girl+Rdp=CN
na=qa-n̓ək^{j}átk-ə-t
Pos=pl-parents-E-3
'The young girls embarrassed their parents.'

(11) a. lu-ʔáːm qóːt-u tas Archie...
in-good heart-1sg Prep (name)
'I'm glad with Archie...' (lit. My heart is good inside with Archie.)

b. sə-lu-ʔáːm=a hak-hóːja k̓apəkúːɬk=a qóːt-u
make-in-good=CN Rdp-clothes children=CN heart-1sg
'The kids' clothes made me happy.'

(12) a. máxs=a k̓apətkúːɬk
grow(pl)=CN children
'The children are growing.'

b. sə-máxs=əs Mildred=a məcaqalé:
make-grow(pl)=CN (name)=CN flower
'Mildred grows flowers.'

sə-をとることが観察された自動詞語幹には次のようなものがあった。状態を表す、形容詞的なものがほとんどであった。

〈sə-をとる自動詞語幹〉

(13) ʔalá:js 'to be lazy', kʷtí: 'to be hungry',
có:q 'to be embarrassed', kʲámk 'to be hot',
luʔá:m 'to be good inside', máxs 'to grow' ...

sə-により派生された他動詞の主語および目的語には以下のようなものが観察された。人を表す名詞、人称接辞・人称クリティックから物を表す名詞まで、多様なものが用いられている。

〈主語〉

(14) nə= (1sg), =təp (1pl), Mildred, k̓apahaná:nq̓ 'young girls', turkey, hakhó:ja 'clothes' ...

〈目的語〉

(15) -n̓u (1sg), -n (2sg), naqan̓əkʲátkət 'their parents', qó:tu 'my heart', məcaqalé: 'flowers', ʔáks 'water' ...

人間が意図的に対象に働きかける例 ('grow flowers', 'heat water'など) も一部みられるものの、「七面鳥が腹をすかせた (=七面鳥のにおいで腹がすいた)」「子供服が私を幸せにしてくれた (=子供服が届いて嬉しかった)」など、主語が意図せずに目的語に作用して、その結果目的語に何らかの状態変化がおきることを表す例が多い。主語・目的語双方が人間の場合であっても、「テレサが私を怠けさせた (=テレサがよく世話をやいてくれて、私はすっかり怠けてしまった)」「少女たちが親を辱めた (=少女たちが何かよくないことをした結果、親をはずかしい目にあわせた)」など、意図的でない作用であることがほとんどである。

3．kʷən-　'make, tell, ask'

kʷən-は、自動詞語幹または他動詞語幹につき、使役的な意味をもつ他動詞語幹を形成する[*4]。自動詞語幹につく場合、元の主語が新たな語幹の目的語となる。以下、aとa'に元となる自動詞語幹とそれを含む文例を、bとb'にkʷən-によって派生された他動詞語幹とそれを含む文例をあげる。

(16) a.　kʷúk　　'to cook' (vi)

a'.　na=n　kʷúk-ə-ṅu

TA=1sg　cook-E-1sg

'I (already) cooked.'

b.　kʷən-kʷúk　　'to make/tell/ask s.o. to cook' (vt)

b'.　na=t　kʷən-kʷúk-ə-ṅu=t　Junior=t　kʲá:tk

TA=3　tell-cook-E-1sg=CN　(name)=CN　last.night

'Junior made me cook last night.'

(17) a.　səmà:j　　'to pick berries' (vi)

a'.　na=n　səmà:j-ṅu

TA=1sg　pick.berries-1sg

'I picked berries.'

b.　kʷən-səmà:j　　'to make/tell/ask s.o. to pick berries' (vt)

b'.　na=t　kʷən-səmà:j-ṅu=t　Angela

TA=3　tell-pick.berries-1sg=CN　(name)

'Angela told me to pick berries.'

4　Shibatani (1976) は、原因となるできごとが必ずしも結果の実現につながるとはいえない 'I told John to go' のような文は使役と呼ぶべきではないとしている。Shibataniのあげた例同様、kʷən-による派生においても、少なくとも一部の例では 'Angela told me to pick berries (but I wasn't able to do it).' のように結果を否定することが可能であると確認されており、これを純然たる使役接辞と呼ぶことには問題があるかもしれない。しかしながら、後に述べるように、kʷən-の表す強制力には弱めの場合から強めの場合まで幅があること、また、kʷən-が2項動詞を使役的に派生する唯一の手段であることから、本稿では考察の対象に含めている。kʷən-の強制力にはどのような要因が関係しているのか、どのような場合にどの程度結果の実現が要求されるのか、確かめる必要があろう。

他動詞語幹についた場合は、元の他動詞の目的語がそのまま目的語として使われる一方で、元の主語は斜格で表される[*5]。海岸ツィムシアン語において、斜格は前置詞 ta または ʔa（固有名詞の前ではtasまたはʔas）によりマークされる。

(18) a.　já:wq̓an　　'to feed s.o.' (vt)

a'.　já:wq̓an-tʰ-u　ɬkʷuwó:mɬk

feed-Tr-1sg　child

'I fed the child.'

b.　kʷən-já:wq̓an　　'to make/tell/ask (s.o.) to feed s.o.' (vt)

b'.　na　kʷən-já:wq̓an-tʰ-u=t　Nanook　tas　Angela

TA　tell-feed-Tr-1sg=CN　(name)　Prep　(name)

'I told Angela to feed Nanook (=dog's name).'

(19) a.　sáksəl　　'to clean s.t.' (vt)

a'.　sa-sáksəl　　'to clean off the top of s.t.' (vt) (sa- 'off')

a''.　sa-sáksəl-tʰ-u　lax-ʔó:　stú:p

off-clean-Tr-1sg　on-top　stove

'I clean the top of the stove.'

b.　kʷən-sa-sáksəl　　'to tell (s.o.) to clean off the top of s.t.' (vt)

5　これは、海岸ツィムシアン語の動詞がとることのできる項（斜格を除く）が2つまでであることによる。

なお、被使役者が明らかな場合、斜格で表れないことがある。次のbの例で斜格名詞（あえて補うとta k̓ó:j (Prep me)）がみられないことに注意されたい。

a.　na　sqaťú:s-u　ləksó:q

TA　close-1sg　door

'I closed the door.'

b.　na　kʷən-sqaťəsťú:s=əs　Dayna　nə-wəlí:l-u=t　kʲiċì:p

TA　tell-close+Rdp=CN　(name)　Pos-eye-1sg=CN　yesterday

'Dayna told me to close my eyes yesterday.'

b'. na　kʷən-sa-sáksəl-tʰ-u　lax-ʔó:　stú:p　tas　Kayla
TA　tell-off-clean-Tr-1sg　on-top　stove　Prep (name)
'I told Kayla to clean off the top of the stove.'

kʷən-をとることが観察された語幹には、次のようなものがみられた。自動詞語幹、他動詞語幹の別にかかわらず、動作動詞[*6]が多く観察された。

〈kʷən-をとる自動詞語幹〉

(20)　səmà:j 'to pick berries',　kʷúk 'to cook',　tɬ̓ɬ:l 'to hurry',
taxsəmhájtk 'to stand still' ...

〈kʷən-をとる他動詞語幹〉

(21)　já:wq̓an 'to feed s.o.',　sasáksəl 'to clean off s.t.',
hú:tk 'to call s.o.',　máła 'to tell s.t.',
kəkúu:l 'to look for s.t.' ...

他動詞主語としてあらわれる使役者には次のようなものが観察された。いずれも人間を表す名詞または人称接辞・クリティックであった。

〈主語〉

(22)　-u (1sg),　=t (3),　Junior,　Angela,　Dayna ...

また、他動詞目的語（元が自動詞語幹の場合）または斜格（元が他動詞語幹の場合）で表わされる被使役者には次のようなものが観察された。こちらも他動詞主語同様、人間を表す名詞または人称接辞であった。

6　海岸ツィムシアン語において、動作動詞は jakʷa（現在），łа təm（近い未来における開始）など、いくつかのテンス・アスペクトマーカーとの共起が可能である点で、状態動詞と異なる。

〈目的語／斜格〉

(23)　　-ṅu (1sg),　-n (2sg),　kɬkuɯ:mj́ú:t 'his sons',
　　wəcmán 'policeman',　Angela,　Bert,　Kayla ...

'make, tell, ask'[*7]という訳にもみられるように、接頭辞kʷən-は、人間である使役者が人間である被使役者に口頭で要求することにより、何らかの動作をおこなわせることを表すといえよう。他動詞語幹につくことが多いことも、この接頭辞の特徴である。なお、kʷən-により表される働きかけの強制力は、強めの場合（'make'）から弱めの場合（'ask'）まで幅があるようである。

4．-ṅ (-l̀)　'make, tell, cause'

海岸ツィムシアン語において、屈折をおこなう語（名詞・動詞）は、共時的にそれ以上分解することのできない語根に、派生接辞、屈折接辞、重複がついて形成される。語根には、それ自身で語幹を形成できる（すなわち屈折接辞をとることができる）自由語根と、派生接尾辞をつけてはじめて語幹を形成することのできる拘束語根とがある。自由語根については、語類（名詞、動詞）や結びつく項の数（1または2）が決まっているが、拘束語根についてはこれらが未指定である。-ṅ (-l̀) は、2節・3節であげた接頭辞と異なり、語幹ではなく語根につく。

どのような語根につき、どのような主語・目的語をとるのかをみる前に、この接尾辞の音韻的なあらわれについていくらか説明が必要であろう。語根が母音で終わるときは、-ṅ のままの形がつく。

(24)　　kʲilò:　'to stop'　　kʲiló:-ṅ　'to stop s.t.'

語根が子音で終わる場合、母音ə（口蓋垂音・声門音の隣ではa）が挿入され、

7　Boas (1902, 1912) では 'cause, order' という訳語も用いられている。

-n̓ の声門化は失われる。ただし、語根末の子音が破裂音・共鳴音の場合は、-n̓ の声門化が失われるかわりに語根末の子音が声門化される。（語根末のハイフンは、その語根が自身では語幹をつくれないこと、すなわち拘束語根であることを示す。）

(25)	haɬáls 'to work'	haɬáls-ə-n 'to hire s.o.'
	sí:p-	sí:p̓-ə-n 'to love s.o.'

-n̓ に先行する語根末の子音が歯茎の破裂音・共鳴音の場合、これらの子音は脱落する。

(26)	k̓ʷá:t 'to be lost'	k̓ʷá:-n̓ 'to lose s.t.'
	hól-	hó:-n̓[*8] 'to fill s.t.'

語根の最終音節を担う母音が強勢をもたない短母音である場合は、語根の末尾が母音であっても破裂音・共鳴音であっても、声門化は単に失われる。

(27)	hóťaq-	hóťaq-a-n 'to boil s.t.'
	sunáːɬa 'to be tired'	sunáːɬa-n 'to make s.o. tired'

声門化が必ずしもこの接尾辞内に観察されるわけでないため、先行研究においてこの接尾辞はしばしば -n, -l の形（あるいはそれに挿入母音を加えた形）で記述されてきた（Boas 1911[*9], Dunn 1979, Dunn 1983, Mulder 1994,

8　この例にみられる母音の長音化は、語根の最終音節を担う母音が強勢をもつ短母音である場合におこる。これは、現在のツィムシアン語において「強勢をもつ短母音＋声門化子音」という連続が子音または語境界の前で許容されないからである。詳しくは、Sasama (1997)を参照のこと。

9　ただし、Boasはこの接尾辞が一般に語幹末（本稿でいう語根末）の子音を変化させることに言及している。

Stebbins 1999など)。しかしながら、語根末に子音がないときに -n̓ の形があらわれること、さらに音韻的な条件により先行の子音が声門化されることから、本稿ではこの接尾辞が声門化という特徴を含むものとして、-n̓ の形で記述する。

いくつかの語根のあとでは、-n̓ のかわりに -l̓ が用いられる。

(28)　pé:q　'to tear, to be torn'　　pé:q̓-a-l　'to tear s.t.'
　　sáks-　　sáks-ə-l　'to clean s.t.'

-n̓ は、自由語根（自動詞語根）または拘束語根について、他動詞語幹を形成する*10。まず、自由語根（自動詞語根）についた例をあげる。aとa', a"には元となる自動詞語根とそれを含む文例を、bとb'には -n̓ によって派生された他動詞語幹とそれを含む文例をあげる。

(29) a.　kʲilò:　　'to stop' (vi)
　a'.　ła　kʲilò:　sə-mà:j-u
　　TA stop　pick-berry-1sg
　　'I stopped picking berries.' (lit. 'my berry picking stopped.')
　a".　ła　kʲiló:-ju　ta　sə-mà:j-u
　　TA stop-1sg　Prep　pick-berry-1sg
　　'I stopped picking berries.' (lit. 'I stopped with my berry picking.')

10　Dunn(1979)は、接尾辞 -n がこれ以外にも名詞から「～に似たもの」を表す名詞を派生（例えばkó:p 'wave'からqó:pʰən 'fish heart, soft palate'を派生）したり、名詞から「～と同じような振る舞いをする」を表す動詞を派生（例えばtáxs 'flounder'からtáxsən 'throw flat on the water'を派生）する機能をもつを記述している。しかしながら、Dunnによってあげられている例には、両者が派生関係にあることが疑問に思われるものが多い。今後より多くの例を集めることでDunnの記述の正当性が確認される可能性もあるが、筆者は現時点ではこれらの機能について述べるに十分な資料を得ていない。このため、本稿でこうした機能についてとりあげることはしない。

b. kʲilóː-n̓ 'to stop s.t.' (vt)

b'. kʲilóː-n̓-tʰ-u sə-màːj-u

stop-Caus-Tr-1sg pick-berry-1sg

'I quit picking berries.'

(30) a. haɬáls 'to work' (vi)

a'. haɬáls-ə-n̓u

work-E-1sg

'I work.'

b. haɬáls-ə-n 'to hire s.o.' (vt)

b'. haɬáls-ə-n-tʰ-ə-n̓u=t Mildred

work-E-Caus-Tr-E-1sg=CN (name)

'Mildred hired me.'

次に拘束語根についた例をあげる。a に拘束語根の形を、b と b' には同じ語根を含む語幹とその文例を（語根の意味を知る手がかりとするため）、c と c' には -n̓ によって派生された他動詞語幹とその文例をあげる。

(31) a. hól-

b. hól-tk 'to be full, to get full' (vi)

b'. kʷəl-hóltk=a nə-j̓úː-ju

quickly-full=CN Pos-basket-1sg

'My basket got full quickly.'

c. hóː-n̓ 'to fill s.t.' (vt)

c'. ɬa hóː-n̓-tʰ-u nə-j̓úː-ju

TA (full)-Caus-Tr-1sg Pos-basket-1sg

'I filled my little basket.'

(32) a. jáːwq-

b. já:wx-k 'to eat' (vi)

b'. jak^{w}a já:wxk^{w}-u

TA eat-1sg

'I am eating.'

c. já:wq̓-a-n 'to feed s.o.' (vt)

c'. təm já:wq̓-a-n-t^{h}-u=t Papa

TA (eat)-E-Caus-Tr-1sg=CN (name)

'I'm going to feed Papa.'

-l̓ が用いられている例を以下にあげる。-n̓ との機能的差異は観察されていない。

(33) a. pé:q 'to tear, to be torn' (vi)

a'. pax-pé:q=a sáw̓ənsk

Rdp-torn=CN paper

'The paper is all torn up.'

b. pé:q̓-a-l 'to tear s.t.' (vt)

b'. təm ʔam ʔaks-pax-pé:q̓-a-l-t^{h}-u c̓əm-sək-sáw̓ənsk

TA just spread-Rdp-tear-E-Caus-Tr-1sg in-Rdp-paper

'I'm going to tear the paper bags open.'

(34) a. qópaq 'to be covered' (vi)

a'. qópaq=a hal̓i:txó:xk ta hak-hó:ja

covered=CN table Prep Rdp-cloth

'The table is covered with clothes.'

b. qópaq-a-l 'to cover s.t.' (vt)

b' qópaq-a-l-tʰ-u hal̓i:txó:xk ta hak-hó:ja
covered-E-Caus-Tr-1sg table Prep Rdp-cloth
'I cover the table with a lot of clothes.'

(35) a. sáks-

b. sáks-k 'to be clean' (vi)

b'. sáksk=a j̓ù:tʰa
clean=CN boy
'The boy is clean.'

c. sáks-ə-l 'to clean s.t.' (vt)

c'. ksə-sáks-ə-l=s Ricky hó:n
out-(clean)-E-Caus=CN (name) fish
'Ricky is cleaning the fish.'

-n̓ (-l̓) がつくことが観察されている語根には次のようなものがある。状態を表すものが多いように思われる。

〈-n̓ (-l̓) をとる自動詞語根〉

(36) pé:q 'to tear, to be torn', qópaq 'to be covered', kʲilò: 'to stop', hałáls 'to work', túu: 'to be dead', sú:lk 'to be dangerous', ləkskʲát 'to be different' ...

〈-n̓ (-l̓) をとる拘束語根〉

(37) sáks- ('clean'), hól- ('full'), c̓əmá:- ('sweet, tasty'), já:wq- ('eat'), lá:łł- ('sleep (pl)'), k̓ʲé:q- ('run away') ...

-n̓ (-l̓) により形成された他動詞の主語には次のようなものが観察された。そのほとんどが人名、人称接辞をはじめとする、人を表すものであった。

〈主語〉

(38)　-u (1sg), -m tis Kayla 'Kayla and I', Mildred, Ricky, Tiffany, Kayla, k̓apətkúːɬk 'kids', cáːq̓ 'clam' ...

目的語には次のようなものがみられた。人間、動物、物、さらには「ベリーを摘む」という行為まで、多様であった。

〈目的語〉

(39)　-n̓u (1sg), -u (1sg), Melissa, Carol, wán 'deer', hóːn 'fish', kʲíːk 'fly', hashàːs 'dogs', tásq 'squirrel', j̓úːju 'my basket', səmàːju 'picking berries', púk 'book', beans ...

-n̓ は、人間が他の人間・動物・物などに対して直接、意図的に働きかけ、何らかの状態変化をおこす際に用いられることが多いようである。

5．おわりに

以上、使役的な働きをもつ3つの接辞をとりあげ、その音形や働きについて記述をおこなった。3つの接辞の違いを簡単にまとめると次のようになる。

	使役者／被使役者	語幹（語根）	意図性
sə-	多様／多様	状態を表す自動詞語幹	非意図的
kʷən-	人間／人間	動作を表す自動詞／他動詞語幹	意図的（口頭で被使役者に要求）
-n̓（-l̓）	主に人間／多様	状態を表す拘束／自由（自動詞）語根	意図的（直接的）

今回は、過去の現地調査で得た自発的な資料をもとにしたが、より正確な記

述をおこなうためには作例を用いた調査が必要である。今後の課題としたい。

略号一覧

1/2/3 1st/2nd/3rd person
Caus Causative
CN connective
E epenthetic vowel
pl plural
Pos possessive
Prep preposition
Rdp reduplication
sg singular
s.o. someone
s.t. something
TA tense-aspect marker
tagQ tag question
Tr transitive marker

参考文献

Boas, Franz, 1902, Tsimshian Texts. Bureau of American Ethnology, Bulletin 27.

—— 1911, "Tsimshian," in Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages Part 1.* Bureau of American Ethnology, Bulletin 40. 283-422.

—— 1912, "Tsimshian texts (new series)." Publications of the American Ethnological Society 3, 65-284. E. J. Brill, Leiden.

Dunn, John A., 1979, *A Reference Grammar for the Coast Tsimshian Language.* National Museum of Man, Mercury Series, Canadian Ethnology Service Paper No. 55. National Museums of Canada, Ottawa.

—— 1983, "Coast Tsimshian Non-Basal Suffixes." *Anthropological Linguistics* 25 (1). 1-18.

Mulder, Jean G., 1994, *Ergativity in Coast Tsimshian (Sm'algyax).* University of California Publications in Linguistics Vol. 124. University of California Press, Berkeley.

Sasama, Fumiko, 1997, "A report on Coast Tsimshian 'interrupted vowels'." In Osahito Miyaoka and Minoru Oshima (eds.), *Languages of the North Pacific Rim,* Vol. 2. 47-60. Graduate School of Letters, Kyoto University.

—— 2001, "A Desscriptive Study of the Coast Tsimshian Morphology." Lit. D. dissertation. Kyoto University.

Shibatani, Masayoshi, 1976, "The grammar of causative constructions: A conspectus." In Masayoshi Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics, Vol. 6, The Grammar of Causative Constructions.* 1-40. Academic Press, New York.

Stebbins, Tonya N., 1999, "Issues in Sm'algyax (Coast Tsimshian) Lexicography." Ph.D. dissertation. The University of Melbourne.